

Abstract

The Old Man and the Child in *The Old Curiosity Shop*

The purpose of this paper is to show the symbolic meaning of the death of Little Nell in *The Old Curiosity Shop* (1841) by considering the novel from the viewpoint of the pilgrimage of the old man and the child. Nell leaves the house of London with her grandfather to escape from the menace of the grotesqueness of Quilp, a moneylender, but she cannot be released from her difficulties; the old man cannot overcome the temptation to gamble without the help of Nell and she has to go through Birmingham as an industrial city. Nell as a victim of the old man overlaps with Victorian children as victims of adults, especially those who worked in mines and factories. Dickens not only created 'the image of the child coming home to heaven' by using a bird as a metaphor of celestial soul and emphasizing the death of Nell in the Victorian age, but also showed the meaning of the forgiveness of sin by Jesus Christ by the representation of the pilgrimage of the old man and Nell.

***The Old Curiosity Shop*における老人と子供**

Key Words: 老人と子供、都市と田舎、工業都市バーミンガム、大人の犠牲者、罪の赦し

1. ハンフリー親方の目に映った老人と子供

The Old Curiosity Shop (1841)は、チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)の4番目の小説で1840年4月25日から1841年2月6日まで *Master Humphrey's Clock* に週刊で出版された。当初ディケンズは、*The Old Curiosity Shop* を6章で完結する短い物語として始めたが、骨董品に囲まれた無垢な子供というアイデアを持って仕事に取りかかると、さらに広がりを持った扱いが必要となった。このとき、彼は、読者が少なくなっていたので、*Master Humphrey's Clock* をさらに続ける方法を探していた。ディケンズは、最初週刊分冊の形式が初期の小説のより長い月刊分冊より融通がきかないことに気づいていたが、しだいに週刊の形式に慣れ、ピカレスク風の旅の語りに移行したとき、小説はひとりではできあがった。¹

作品を書き進める際ディケンズは、コントラストの原理を用いている。このコントラストの原理は、ポール・デイヴィス(Paul Davis)が指摘しているように、骨董品と老人にとり囲まれた無垢な少女というアイデアによりしっかりしたものとなった。² 作品の最初、ハンフリー親方は夜の散歩で一人の少女に道を尋ねられる。彼は、無思慮にも彼女を夜一人で使いに出した老人について、疑念を抱きながら道案内をし、彼女の家に着く。そこでハンフリー親方は長い灰色の髪をした小柄な老人が進んでくるのを見る。ここでディケンズは、ハンフリー親方の目に映った老人と彼が進んでくる場所の様子を描写しているが、骨董品と老人の様子は、共に古くすり減っているという印象を与え、少女ネルとコントラストをなしている。作品の最初におけるこのコントラストは、作品の進行とともに、ポール・デイヴィスが注目する、若者と老人、無垢と経験、善と悪、美と醜さ、受動性と暴力、女性と男性や、³ ポール・シュリック(Paul Schlicke)の注目する無垢と邪悪、生と死といったコントラストに形を変えながら発展していく。⁴ ハンフリー親方は、少女を一人で使いに出した老人に抗議して、「子供たちがまだ幼児の時期もぬけてないのに、世の荒波の中に入っていく姿を見ると、いつも悲しいことに思っているんです。信頼感と純真さは、神さまから授かった子供たちの最高の性格ですが、世に出るとそれが阻害され、世のよろこびをまだ味わえぬうちに、世の悲しみを知ることになるんですからね」(6)と言う。老人はネルの場合には絶対そんなことはない、と否定するが、使いに行った後、あわただしくネルが夕食の準備にとりかかることから、老人が自分の都合のいいようにネルを利用していることは明らかである。さらに老人は、「あの娘は近く金持ちになり、りっぱな貴婦人になりますとも」(6)と言うが、彼の金持ちになる計画が作品においてネルの運命を危機(最終的には死)へとおいやることを考えると、老人はネルにとって非常に危険な存在であると言える。ディケンズは、老人とネルの運命を *King Lear* や *The Pilgrim's Progress* (1678) に言及することで象徴的に描いているが、*The Old Curiosity Shop* と両作品との関係は、すでに批評家によって注目されてきた問題であるにもかかわらず、断片的指摘にとどまり、*King Lear* の性格弱点悲劇としての側面と *The Pilgrim's Progress* の天国を求めての巡礼という側面がいかに作品の中で有効に働いているかについてはいまだ明確に説明されていない。本論文では、老人と子供という観点から作品を考察することにより、*King Lear* と *The Pilgrim's Progress* が作品の中で持つ意味とネルの死への旅の意味、さらにネルの死の象徴的意味を提示したい。

2. 都市から田舎へ

ここでディケンズのアイデアを説明するハンフリー親方の語りに注目したい。ハンフリー親方は、骨董屋の中で見た骨董品をネルと結びつけた存在として思い浮かべる。さらに彼は、「途方もないグロテスクな群れの中で、孤独な彼女の道を進んでいく姿」(13)と「群れの中で、ただひとつの純粹で、新鮮な若々しい存在」(13)を想像する。このことは作品の

中で重要な意味を持っている。なぜならば、ハンフリー親方の想像した通りに作品は展開していくからだ。

第3章の最初に現れるクウィルプ(Quilp)は、ハンフリー親方が想像したグロテスクな群れの中の一人と言える。背はひどく低く、小人とも言えるほどだが、頭と顔は巨人にもふさわしいほど大きく、黒い目は落ち着きがなく、陰険で狡猾な印象を与え、その笑いはグロテスクで、あえいでいる犬の様相を持つクウィルプは、借金返済の脅威により老人とネルを窮地に追いやる。クウィルプは自身が貸した金を老人が賭博につぎこんだと言って老人を追い詰め、「つまらない賭博師風情にこのおれがめくらにさせられるなんて！」(74)と言う。このクウィルプの言葉に対して、老人は、「わしは賭博師ではないぞ」(714)と言い、「神も照覧、自分の利益、賭博の楽しみでそれをしたんではないぞ。金を賭けるたびごとに、わしは心の中であのみなし児の名をささやき、その賭けを祝福して下さるように、神さまに祈ってたんだ。祝福は一度も授からなかったがね」(74)と自身の行為を説明する老人の言葉は、彼がネルの生涯を安楽にする目的で賭博に手を出したことだけでなく、彼自身の行いがネルを窮地に追いやっていることを反省していないことを示している。

ジョージ・H・フォード(George H. Ford)は、「*The Old Curiosity Shop*において、読者は何度も作家がもう一つの *King Lear* を書こうとしていると感じる。両作品の平行は、ネルの死後の祖父の深い悲しみを描写している場面においてははっきりする。そして、このことから両作品が比較されて当然であるかのように見える。」と述べる。⁵ フォードが指摘しているように、ネルの死後の祖父の深い悲しみは、コーディア(Cordelia)の死後のリア(Lear)王の嘆きを思い起こさせるが、類似点はそれだけにとどまらない。老人は賭博により幸福を得ようという誤った判断によりネルと自身を窮地においやる一方、リア王がゴネリル(Goneril)とリーガン(Regan)の甘言に欺かれ、末娘コーディアの真情が理解できず、悲劇を招くことから、両作品は、性格弱点悲劇として読むことができるのだ。

さて、クウィルプに自身の行いを暴かれた後、老人は精神錯乱にもなうひどい熱に襲われ、何週間ものあいだ危篤状態におちいる。ネルは、やつれ細っていく老人への献身的看護を行うが、彼らの家は、法律の力によりクウィルプに占領されることとなる。クウィルプは家の中に入りこみネルにも脅威的存在となる。ネルにとってもはやロンドンが安住の場所ではなくなったのだ。

シュバルツバッハ(F. S. Schwarzbach)は、「*The Old Curiosity Shop* において都市は恐怖の場所と言ってもいい。死の都市でネルはひどく貧しくなりさらに悪いことにクウィルプに性的に侵される危険にさらされる。」と述べているが、⁶ ネルの状況はまさに老人がもたらしたものであり、*King Lear* の第5幕第3場でリアとともに囚われの身となるコーディアの状況を思い起こさせる。二人の娘に会わないかと聞くコーディアに対して、リアは会わないと言い、自身とコーディアを籠の中の鳥にたとえ、「俺の口から祝福の言葉が欲しいと言うなら、俺はお前の前にひざまずいて赦しを乞うことにしよう」(. . .8-18)と言う。リアの言葉は、*The Old Curiosity Shop* の第12章で、ひざまずこうとしているような

格好で、自分を赦してくれ、とたのみ、家から逃れる決意をした老人が、「明日の朝、いいかい、この悲しみの場所から面をそむけ、鳥のように自由に幸福になれるんだよ」(94)と言うことを思い起こさせる。このことから、ディケンズが *King Lear* におけるリアとコーデリアの関係と *The Old Curiosity Shop* の老人とネルの関係に再現したと考えられる。⁷ ディケンズは鳥籠の中の鳥によってネルを象徴的に表している。ネルはロンドンの家を出発する前にキット(Kit)の手に入ることを期待し、鳥を置いていくが、鳥は、都市から田舎へと移行することにより精神の監禁状態から解放されるネルを象徴している。

ロンドンを離れた老人とネルは、鳥の歌声が聞こえ、波立つ草の美しさと深い緑の木の葉の見られる快い野原で休息をとる。ネルはそこで祈りをささげ、ロンドンの家の棚の上の本を思い出す。その本とは、木版画づきの古い本、すなわち、ジョン・バニヤン(John Bunyan, 1628-88)の *The Pilgrim's Progress* である。ネルはかつてこの本を夕方に読みふけり、その言葉がすべてほんとうのことか、奇妙な名前のあるそうした遠くの国はどこにあるのだろう、と考えていたが、自分たちが出てきた場所をふり返ってみたとき、その本の一部が彼女の心に強く浮ぶ。ネルは祖父に *The Pilgrim's Progress* を思い浮かべながら「もしあの本に書いてある場所がそのとおりだとすれば、ここはここよりもっと美しく、ずっとずっといい場所なわけね。その点をべつにしたら、わたしたちふたりがクリスチャンになり、わたしたちのもってきた心配と苦しみをみんな草の上におろし、それをもう二度ととりあげることがないような感じがすることよ」(116-7)。このようなネルの言葉に対し、老人は、「絶対に戻らないぞ、お前とわしは、いま町から解放されたのだ、ネル、やつらに連れ戻されたりするものか」(117)と言うが、この箇所は *The Pilgrim's Progress* においてクリスチャンが「滅亡の市」から出かけ背中に背負っている荷物を下ろして楽になろうとすることを思い起こさせる。このことからディケンズが「滅亡の市」であるロンドンを離れる老人とネルをクリスチャンにたとえ、彼らの巡礼を描いていることは明白である。しかし、ロンドンを離れた後もネルは、依然として精神の平安を得ることはできない。なぜなら第 27 章でネルはろう人形の興行主ジャーリー(Jarley)夫人に雇われることになった後、ある町に立ち寄るが、その夜偶然クウィルプを見かけ、自身がクウィルプにとりこまれるような気持ちに襲われるからである。その後も彼女は、いつもクウィルプの醜悪な顔と成長のとまった小さな姿の幻想にとりつかれる。このことからネルは、旅の途中もクウィルプの脅威から逃れられないのであるが、彼女の旅をさらに困難なものにすることがある。それは、老人の賭博癖である。老人はネルの所持金を、賭博師アイザック・リスト(Isaac List)たちとのトランプ勝負に使う。小さな財布をひったくり、「幸福になる方法は、札とさいころにあるんだ」(223)と言う老人は、どんな強欲な賭博師よりももっと因業と欲得に走りながら自分のためになどとは思っていない。これだけでなく老人は、第 30 章にネルの寝室にしのみこみ、彼女の金を盗む⁸。彼女が見た老人の顔は貪欲でひきつり、きびしさを増し、目は貪欲さで異常に輝いているが、この光景を見た後、彼女は大変な恐怖に襲われる。文なしになり、みじめになりながらも老人の賭博癖はとどまるところを知らず、「お前の手

に入る金はすべて、わしに渡さねばならない。わし自身のためじゃなくて、お前のために使う目的のためなんだ。」(240)と自身の行為を正当化しようとする。このことからネルの旅は、老人の賭博癖のため、平安な旅ではなく、非常に危険な旅となる。このことは、*The Pilgrim's Progress* においてエヴァンジェリスト(Evangelist)の教え、すなわち、小さなくぐり門へ行く道をとらず、ワールドリ・ワイズマン(Worldly Wiseman)の意見に従って逆に危機を招いてしまうクリスチャン(Christian)の旅を思い起こさせる。クリスチャンに対し、エヴァンジェリストは、「狭き門より入ることを努めよ」(Luke 13:24)というイエス・キリストの言った言葉を引用し、その理由を、「生命に導く門は狭く、これを見出すものは少なし」(Matthew 7:13-14)と言う。⁹ クリスチャンは、簡単に楽になるためワールドリ・ワイズマンの行った道をとるが、その道が誤りであることを知り、再びエヴァンジェリストの言っている言葉に従い、くぐり門へと行く。このことから、*The Old Curiosity Shop* において、道を誤り賭博のため金を盗み出す老人を救い出すネルは、*The Pilgrim's Progress* において誤った道をとったクリスチャンに正しい道を教えるエヴァンジェリストの如き存在と言えよう。デイヴィスは、ネルの旅のいくつかのエピソードがよく知られたアレゴリーである *The Pilgrim's Progress* を思い起こさせる、と指摘しているが、作品においてネルが賭博に走ろうとする老人の導き手としての役割を果たしていることが重要である。¹⁰ ネルの導きにより、かろうじて老人は自身の危機的状況から救われるが、彼らの旅において重要なことは、賭博のため金を奪われたネルが「大人の犠牲者となった子供」を印象づけることだ。

3. 工業都市バーミンガム

ここで老人とネルが第 44 章と第 45 章で通りかかるバーミンガムに目を向けてみたい。ディケンズは、無能で危険な老人と旅をするによって、「大人の犠牲者となった子供」を表しているのみならず、彼らが通りかかるバーミンガムによりさらにその意味を強めているからだ。産業革命はイギリス社会を発展させる一方で、多くの少年労働者を生み出した。木綿労働者の統計は、13 歳以下の少年少女が 13 パーセントを占めていることを示している。*Oliver Twist* (1838)に出てくるような救貧院から 7、8 歳の少年までかり出されるのである。だから、少年は勉強する時間がなく、ナポレオンはもとより、国王の名も知らないし、教会に行ったこともない。炭坑では少年たちは、狭い坑道でよつんばいになって車を引かされていた。労働時間も 13、14 時間をこえ、賃金も低かった。¹¹ マンチェスターにおいては、労働者の子供の 57%以上が 5 歳にならないうちに死亡するのに上流階級の子供のうち 5 歳前に死亡するのは、わずか 20%しかなく、このことは子供のかよわい身体が低い生活状態の悪影響に対して抵抗力が低く、悪い生活条件のもとにいた労働者の子供がより多く死亡したことを示している。¹² バーミンガムやブラックカントリーでは金属産業が盛んで、多くの子供たちが家の作業場や仕事場で働かされていた。小さな金属を取り扱う労働にかり出

される子供の平均年齢は8～9歳であった。¹³

*The Old Curiosity Shop*で老人とネルを溶鉱炉が日夜燃え続けている場所に連れて行った火夫は、金属産業に携わっている人間である。自身が生まれて以来、溶鉱炉の火が燃え続けていたと語る彼は、「火はわたしにとって本のようなもんさ」(331)と言う。彼の言葉は、彼が少年の頃からずっと勉強をする暇もなく働いていたことを示している。さらに彼は、彼の住んでいる地域では女性がよく働き、自身の母親が働きすぎで死んでしまい、父親は火の前で死んだと言う。このことにより、ディケンズが *The Old Curiosity Shop* において、パーミングムでも他の工業都市と同じように、労働者が劣悪な環境で苦しんでいて、女性労働者もまた重労働に従事していたことを示していることは明らかである。両親を失ってしまった火夫は、父親を失ったときの自身のことをネルの姿で思い出し、彼女を火のところに連れて行きたいという気持ちになる。ここで少年労働者に関してろう人形の興行の手伝いをしているネルに対してかつて寄宿・通学学校の校長であるモンフラザーズ (Monflathers)先生が言った言葉を思い起こす必要がある。彼女の国の工業を助け、労働を促すような発言は、労働者階級の子供の人権を無視したような発言であると同時に、当時の大人が子供を労働力として考えていて子供が犠牲となっていたことを示している。溶鉱炉の火夫もまた、こうした時代の犠牲者と言っていいが、彼の姿は、賭博癖のある老人と旅をするネルの姿と重なる。すなわち、ネルは時代の中で「大人の犠牲者」となった少年労働者たちを象徴する存在と言ってよかろう。溶鉱炉の火夫と別れた後、ネルは老人を罪と恥辱からさらに引き離そうと旅を続けるが、火夫が彼らに教えてくれた道は、大きな工業都市の騒音とよごれと蒸気に包まれ、草木は腐敗してしまっている。老人は、「あの人が教えてくれた道はわびしい道だ」、「他の道をとったらどうだろう」(334)と言うが、ネルは老人に対し、「この道の向うにわたしたちが安らかに暮し人を苦しめたりする気がぜんぜん起きない場所があるのよ。そうした楽しいみとおしのある道を進み、その道がたとえわたしたちが心配して考えているのより100倍もひどい道でも、その道を避けたりはしないことよ」(334)と言う。この老人とネルの会話は、*The Pilgrim's Progress*におけるクリスチャンの迷いとエヴァンジェリストとグッド・ウィル(Good-Will)によって導かれた後のクリスチャンを暗示しているかのようなようである。老人の言葉は、あたかも彼が再び賭博への誘惑にかられているかのような印象を与え、彼の言う「道」とは、*The Pilgrim's Progress*においてワールドリ・ワイズマンがクリスチャンに教える「近道で困難を伴わない道」のごとき道と言えよう。¹⁴

他の道をとるといふ誘惑をふりきり、二人は工業都市を通り過ぎるが、この工業都市の暗い心をおしつぶすような力は、二人の心にも影響を与え、二人は恐ろしい陰気な気分になる。夜、全ての煙突が炎を吹きあげ機械が騒々しく音をたて、失業した労働者の群れが道路で示威行動をし、¹⁵粗末な棺をいっぱい積んだ荷車がゴロゴロと音を立てて通り、孤児が泣き叫ぶ様子は、産業社会の弊害を伝えているのみならず、産業社会において大人の犠牲者となった子供を印象づけている。そして泣き叫ぶ孤児は、老人とともに夜の工業都市

をさまよいあるくネルとイメージの上で重なる。わが身を心配しての恐怖を感じずに、あわれな老人のために祈りをささげるネルは、あまりの疲労のため倒れてしまうが、「いままでこの娘がどんなに病んでいるかを、わたしは考えたこともなかった」(340)という老人の言葉は、彼の自分本位で利己的な性質を示しているのみならず、産業社会で子供たちを酷使した大人たちをも暗示しているかのようである。

ネルは、偶然再会したマートン(Marton)先生の助けによりかろうじて救われるが、ディケンズは、ネルとマートン先生の会話を通じ、「大人の犠牲者」としての子供のイメージを印象づけ、巧みに未来のネルの姿、すなわち、「天に召される子供」の前兆としている。ネルは、「遠く離れたところで先生にお会いできなかつたら、わたしは死んでしまい、おじいさんはひとりぼっちになったことでしょう」(343)と言うが、マートン先生は、「死ぬ話はやめにしよう」(344)と言い、子供の死についての話題を避ける。このことは、マートン先生が、かつて自身の生徒であったハリー(Harry)の死を思い出し、ネルと重ね合わせて考えていることを示している。注目に値することは、ハリーには祖母がいて孫息子の時ならぬ死を悲しんでいたことだ。ネルは、ハリーの亡くなった日の夜、少年が天使に混じって幸福にほほえんでいる夢を見るが、祖母とハリーの運命は、祖父とネルの運命の前兆となっている。ネルもまた、老人を残して先に死んでしまうからである。

ディケンズは、老人とネルが工業都市バーミンガムを通り過ぎる様を描くことにより、産業社会と大人の犠牲者となった子供を印象づけ、子供の死が悲劇的な死であることを示す一方で、バーミンガムを通り過ぎ、田舎に落ちついた後のネルの死を描くことにより、子供の死が悲劇的死にとどまらず、安らぎと幸福に満ちた死であることを示している。

4. ネルの死が象徴するもの

老人とネルは、工業都市を通り過ぎた後、マートン先生とともに工業都市と対照的な田舎の風景を経、最後に目的地の村へたどりつく。マートン先生は、村で教会書記と先生に任命され、年収 35 ポンドを得ることになり、老人とネルはマートン先生の恩恵を受け古い家を提供される。部屋を見たネルが「静かな幸福な場所　そこで生活を送り、死ぬのを学ぶのにいい場所だわ」(386)と言うと、先生は「死」という言葉を打ち消すかのように「生活を送り、生きるのを学び、心と体の健康をたかめるのにいい場所だよ」(386)と言う。ネルの心の中では最初、死への恐怖で占められていたが、マートン先生の親切な行為により、平安を得る。彼女は、夜、再び小さな生徒ハリーと、かつて古い聖書の絵で見たことがある眠っている自分を見下ろしている一列に並んだ明るい天使の顔の夢を見る。ディケンズはネルが見るこの夢により、再び彼女の未来を暗示している。牧師を訪問したマートン先生は、老人とネルは他に友も家もなく、自分と運命をともしることとなった、と伝える。牧師は、「きみの希望どおりにしなさい。彼女はまだとても幼いですね。」(389)と言うが、彼の言葉に対し、マートン先生は、「逆境と苦しみで老いています。」(390)と言う。マート

ン先生の言葉は、ネルが老人を賭博への誘惑から引き離すため旅を続けていて疲れきっていることを示す。老人は、かつて自分だけの安逸を思うといった利己的な考慮のためにネルのことを忘れ賭博に走り、ネルを老けさせてしまったのだ。ネルはいわば、彼を賭博への誘惑から救い出す母親の如き存在と言ってよかろう。ディケンズは、天に召されるネルを、キットが持ってきた「籠の中の鳥」で象徴的に描いている。グロテスクなクウィルブの脅威から逃れるためロンドンの家を離れたネルは、老人の存在により完全に自由とはなれなかったが、死によりようやく地上の苦しみから解放される。「籠の中の鳥」は、いわば、地上の牢獄から解放された天上的な魂のメタファーと言っていいだろう。マートン先生は、ネルの死について、「神さまの正義はこの地上で終わるものではありません」(539)と言うが、彼の言葉は、老人に対して献身的であり、彼を賭博から救い出したネルを称える言葉である。ディケンズは、マートン先生の言葉に付け加えるかのように、ネルの死に関連づけて、「死の暗い小道は、天に通じる光の道になるのだ」(544)と述べているが、このことはヴィクトリア朝時代において若くして死んだ子供たちの死が安らかであって欲しいというディケンズ自身の願望を読者に伝えている、ととらえることができよう。老人は、かつて祖母がハリーに先立たれたように、ネルに先立たれる。彼は、毎日、終日彼女が自分のところへやって来てくれると信じ、墓のところでネルを待ち続けているが、春の快い日に死ぬ。老人がネルが戻ってくることを期待し続ける姿は、ネルが生前老人を賭博への誘惑から引き離し、常に母親のように彼を導いていたことを印象づけている。

ここで、キットが作品の最後に語る言葉に注目したい。キットは、自身の子供たちにネルについて話をしてくれとせがまれ、「全てのよい人が行くように、ネル嬢ちゃんも天国に行った。お前たちもよい人間になれば、いつかはそこに行き、自分がまだ小さな少年だったころと同じようにネル嬢ちゃんに会って話をするようになるんだよ。」(554)と話す。このキットの言葉は、*The Pilgrim's Progress*において巡礼者クリスチャンの妻、クリスティアナ(Christiana)が自身の子供たちに、言葉と行いによって人間が罪を赦されたことを覚えておくように言う箇所を思い起こさせる。グレイト・ハート(Great-heart)はクリスティアナに対しクリスチャンは、「功德の証拠を見るため十字架のところまで荷を運ばされた」と説明する¹⁶。このことによりディケンズは、賭博への誘惑からネルを窮地におとし入れたが、ネルの導きにより救われ、行いを改めたがゆえに罪を赦された老人をクリスチャンにたとえていると考えられる。リードは、ネルはキリスト教の徳目という観点から模範的人物である、と述べているが¹⁷、老人を導く存在であるだけでなく、老人の犠牲者となって天に召されるネルは、罪の赦しという観点から人類の罪をあがなうイエス・キリストを象徴する存在となるのだ。

結論

以上、*The Old Curiosity Shop* を老人と子供という観点から考えてきたが、ディケンズは、老人とネルの旅の物語を *King Lear* と *The Pilgrim's Progress* をアイディアとして用いることにより、ネルが賭博に走りやすい老人の魂をかりうじて自身が犠牲となって救い上げる物語としている。老人にエヴァンジェリストのごとくネルが正しい道を示さなければ老人とネルの物語は、性格弱点悲劇のままで終わったことであろう。さらにディケンズは、工業都市バーミンガムをさまよう老人とネルを描き出すことにより、「大人の犠牲者としての子供」を印象づけ、最後に安らかなネルの死を描くことにより、自身のヴィクトリア朝時代において大人の犠牲者となった子供の死が安らかであってほしいという自身の願望を表現している。ディケンズがネルの死を義理の妹のメアリー・ホガース(Mary Hogarth)の死に対する自身の気持ちから生み出したことはよく知られた事実であるが、ディケンズは自身の個人的な体験をヴィクトリア朝時代と結びつけ「天に召される子供のイメージ」で統一的に表現した、また、老人とネルの巡礼を通してイエス・キリストによる罪の赦しの意味を読者に示した、と断言していいだろう。

注

- 1 Paul Davis, *Dickens Companion*, 348.
- 2 *Ibid.*, 349.
- 3 *Ibid.*, 349.
- 4 Paul Schlicke, “*The Old Curiosity Shop*”, in *Oxford Reader's Companion to Dickens*, 426.
- 5 George H. Ford, *Dickens and his Readers*, 69.
フォードは、*King Lear* と *The Old Curiosity Shop* の違いを状況の違いであると考え、「*King Lear* においては強いものが打ち負かされ、*The Old Curiosity Shop* では、苦しむ者は弱者である」と述べる。(*Ibid.*, 70)
- 6 F.S. Schwarzback, *Dickens and the City*, 71.
- 7 ポール・シュリックは、「ディケンズが逆境において、純粋な魂の若い女性の愛によって支えられるいこじな老人のイメージを作り上げることに際して、*King Lear* を念頭においていたことは明らかである」と指摘している。 [Paul Schlicke, *op. cit.* 424.]
- 8 ロバート・ニューサム(Robert Newsom)は、「老人がネルの金を盗む場面はレイプを想像させる場面である」と指摘している。また彼は、「老人はサディスティックなクウィルプに匹敵するほど邪悪である」と述べている。 [Robert Newsom, *Charles Dickens*

Revisited, 88.]

- 9 John Bunyan, *The Pilgrim's Progress*, 19.
- 10 Paul Davis, *Charles Dickens A to Z*, 278-79.
デイヴィスは、ネルの老人を正しい道に導く寓意的役割に注目しているが、具体的にどのように導くか具体的に明示していない。本論文では、ネルの寓意的役割について明示した。
- 11 井上幸治（編）『世界の歴史 12 ブルジョアの世紀』、157.
- 12 フリードリヒ・エンゲルス（著）全集刊行委員会（訳）『イギリスにおける労働者階級の状態 1』、220.
- 13 Pamela Horn, *Children's Work and Welfare, 1780-1890*, 32.
- 14 John Bunyan, *op. cit.*, 18.
- 15 ハンプリー・ハウス(Humphry House)は、労働者の群集について、群衆は、「チャーチスト運動家ではないが、産業労働者の大部分がチャーチスト運動の間、そうであったと思われるもの、すなわち、野蛮で恐ろしい群集の典型である」と説明している。
[Humphry House, *The Dickens World*, 180.]
- 16 John Bunyan, *op. cit.* 175.
- 17 John R. Reed, *op. cit.* 110.
リードはネルの死を憎悪と復讐の典型であるクウィルプの死と対照的な死ととらえている。またマイケル・ウィーラー(Michael Wheeler)も、ネルの死をクウィルプの死と対照的な死ととらえ、彼女が死後天国において永遠の命を得ると考えている。
[Michael Wheeler, *Death and the Future Life in Victorian Literature and Theology*, 295.]本論文では、老人との関係からネルの死をとらえ、彼女をイエス・キリストを象徴する存在であると結論づけた。

Works Cited

- Bunyan, John. *The Pilgrim's Progress*. Oxford: Oxford UP, 1966.
- Dickens, Charles. *The Old Curiosity Shop*. New York: Oxford UP, 1991.
- Davis, Paul. *Dickens Companion*. Harmondsworth: Penguin Books, 1999.
. *Charles Dickens A to Z*. New York: Checkmark Books, 1999.
- Ford, George H. *Dickens and his Readers*. New York: The Norton Library, 1965.
- Horn, Pamela. *Children's Work and Welfare, 1780-1890*. Cambridge: Cambridge UP, 1994.
- House, Humphry. *The Dickens World*. London: Oxford UP, 1961.
- Reed, R. John. *Dickens and Thackeray*. Athens: Ohio UP, 1995.

Shakespeare, William. *The Arden Shakespeare: King Lear*. Ed. Kenneth Muir. New York: Methuen & Co. Ltd., 1972.

Schlicke, Paul. "The Old Curiosity Shop", in *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Ed. Paul Schlicke. Oxford: Oxford UP, 1999.

Schwarzback, F.S. *Dickens and the City*. London: The Athlone Press, 1979.

Wheeler, Michael. *Death and the Future Life in Victorian Literature and Theology*. Cambridge: Cambridge UP, 1990.

井上幸治（編）『世界の歴史 12 ブルジョアの世紀』、中公文庫、1991.

エンゲルス・フリードリヒ（著）全集刊行委員会（訳）『イギリスにおける労働者階級の状態 1』、大月書店、1997.

出典：『中国四国英文学研究』（日本英文学会中国四国支部）創刊号、2004年10月